

時の“特化”を表す名詞述語文

— 〈～時だ〉、〈～昨今だ〉などを例に

田中 寛

◆要旨

連 体修飾節を受ける名詞が述語成分となる名詞述語文には、モーダルな機能をもつ、いわゆる文末名詞文を含め様々なタイプが観察されるが、本稿では時間名詞を用いた名詞述語文に注目し、これらの意味と機能を考察した。その結果、いくつかの形式には、(1) 事態の周囲への伝達、気付け、注目表示として働く用法、(2) 日常的に生じる、ある種の実感や感慨をこめて描いたり回想したりする用法、(3) 談話の導入部分、終結部分として当該内容をきわだたせる用法、(4) 時間認識における主体の行為のあり方を明示する用法がみられることを確認した。これらの諸形式のなかには、聞き手に対する“示唆”、主体の“感慨”といった表出の機能がみられ、ある種の伝達のムードを構成していると考えられる。さらに、本稿では時間名詞が接続成分となるほか、文末成分との相関関係がみられる現象についても指摘した。

◆キーワード

時間名詞、名詞述語文、文末名詞、時の〈特化〉、表出のムード

◆ABSTRACT

Nominal predicate sentences, in which the noun modified by the adnominal modification clause functions as the predicative component, may include various types with modal functions. The present paper surveys the meaning and function of nominal predicate sentences containing time nouns. The functions identified include: (1) to communicate, notify and display attention about a situation to others, (2) to portray or recollect certain kinds of actual feeling and deep emotion that occur in daily life, (3) to highlight the corresponding content as the introductory or final part of a conversation and (4) to explicitly indicate the subject's actions in terms of the perception of time. Among these various forms, certain functions of expression such as of "suggestion" to the listener and of "deep emotion" of the subject are found, which may be considered as constituting a certain kind of communication of mood. Furthermore, it is pointed out in this work that there is, in addition to a role of the time noun as a connective component, a tendency for some correlation with the sentence ending component.

◆KEY WORDS

time noun, nominal predicate sentence, sentence ending noun, (specification) of time, mood of expression

The Nominal Predicate Sentence
Expressing "Specification" of Time
With such phrases as "～*toki-da*",
"～*sakkon-da*" as examples

HIROSHI TANAKA

1 はじめに——名詞述語文の多層性

名詞が述語成分となった名詞述語文には、大きくは

- (1) a. 東京自動車は来週見学する工場です。
b. 私が日本に来たのは去年の三月だった。
c. もう彼とは会わない約束でした。(；約束をしました)

のようなタイプがある。(1a)、(1b)ではいずれも述部(波線)は主部の題目に対する解説を示すが、(1c)のように主部が脱落したのも散見される。(1a)、(1c)はそれぞれ連体修飾構造を受ける名詞が述部の中心をなしている^[註1]。

一方、いわゆる文末名詞文と呼ばれるタイプには次のようなものがみられる。(2c)は「～決意を固める」などの連語性述語文もみられる。

- (2) a. 法案は来週にも国会で成立する見通した。
b. 野党は徹底的に与党の政策を追及する構えだ。
c. これまでの練習に自信をもって試合にのぞむ決意だ。

「見通し」「構え」「決意」といったこれらの名詞は連体修飾句を受けながら形式化、機能化が進んだもので、これまで新屋(1989)、田中(2004,2010)、さらに佐藤(2004,2006)など個別的検証も含めて考察が進められ、文末名詞という用語もほぼ定着しつつあるが、その内実は複雑多様をきわめる。また、角田(1996)や井上(2010)では「体言締め文」という特徴に着目して類型論的研究、対照研究も一部進められている。これらの構文に現れる名詞群については、上述の先行研究にくわえて野田(2006)、松木(2011)などによる分類が試みられているが、名詞の実質的な意味が大きいものから、機能的で形式名詞的な性格のものを含め、各々の文法化についてはなお検討の余地を多く残している。また、すなわち連体修飾構造を受ける名詞述語文との境界の不透明なものが介在する。このほか、冗長的、附加的ともいえる次のような名詞述語文を用いた、

指示的、確認的な用法も散見される。

- (3) a. 主人ってコーヒー嫌いな人じゃないですか。
b. いつまでたってもダメな私ですね。
c. 祇園祭で賑わう四條河原町です。

(3a)(3b)はある範疇の属性を示し、(3c)は「四條河原町からお送りします／お送りしました」のように実況の冒頭あるいは締め括りの場面に現れる。こうした名詞述語文にくる名詞の性格、文成立の認可条件については解明すべき点も多いが、ある種のモダリティ的な傾きをもつ側面もまた看過できない事実であろう。本稿では名詞述語文の内包するメカニズムを解明する切り口として、次のような時間名詞を述語とする文に着目する^[註2]。

- (4) a. 今こそ復興に向かって起ち上るときだ。
b. 5時に出たのなら、もう着いてもいい頃だ。
c. 健康のありがたさをひしひしと感ずる昨今です。

これらの文は事態を時間的な縛りから解放し、聞き手に対しての何らかのメッセージの発信、情報提供にあずかっている。(4c)のように手紙文の時候挨拶に用いられるほか、間接的な警告や呼びかけ、助言にもなりうる。いわば「模様だ」などの「文末名詞」文の周縁にあって、なお実質的な連体修飾句構造の残存を認めながら、ある種の定型化が進んだ名詞述語文とみなしうる。

なお、本稿では連体修飾構造を受けた名詞が述語成分となる形式を扱うこととし、(1b)のような倒置文は必要に応じて言及するにとどめる。

2 時の“特化”、“焦点”を表す用法

一定時間の幅をどう切り取るかによって、表される事態には固有の、あるいは一般的な性格の意義付けが観察される。以下、それらの代表的な形式について述べる^[註3]。

2.1 〈～時だ〉、〈～時間だ〉の用法

〈～時だ〉は「～時が来た」のように、事態や事象がこれから発生する、または発生した時点での周囲への気付け、注目表示として機能する。以下の例のように何かをなす際の当然の時間帯、喫緊の事態を指すことが多く、しばしば「いまこそ」「いまや」などの副詞、「べき」などの助動詞をとともなう。

- (5) 社会の流れは、確実に変わってきている。今こそ、手を取り合って動く時だ。(「五体不満足」)
- (6) たしかに今は、沈着と冷静こそが求められるべきときだ。(「砂の女」)
- (7) きのうは、24年前に横田めぐみさんが拉致された日である。北朝鮮側は29歳で自殺したと言うが、先方の不誠実を裏づける生存情報、目撃証言が伝えられている。日本政府はあらゆるルートで再度説明を求める時だ。(朝日2011.11.18)

〈～時だった〉は話し手の回想、想起をとともないつつ話題になっている状況や内容に言及する際に用いられる。

- (8) それに彼は夏の避暑地を選び迷っている時だったので、この温泉村へ家族づれで来ようかと思った。(「雪国」)
- (9) それではほかに何かいい手があったかというと、とにかく経済の実力もなし、政府としての権力も弱いというときだったから、結局、なるようにしかなかったのかもしれない。(「激動の百年史」)

(8)、(9) にみられる「かと思う」「かもしれない」などの共起的な要素からも回想的な意図が読みとれる。一方、〈～時だ〉には〈～のは～時だ〉という題目・解説型の形式で用いられるものがある。

- (10) 軍服がほんとうに搾るほど汗に濡れたのは、匍匐前進の訓練のときであった。(「黒い雨」)

- (11) このようなことは日常茶飯事。とくに気にも留めずに、その場をやり過ぎそうとした、その時だった。(「五体不満足」)

「その時だった」は、直後の事態発生局面をより際立たせた言い方である^[註4]。

〈～時間だ〉にも特定の時間を指示する機能がみられる。「時間」にはそもそも「英語の時間」「美術の時間」「休み時間」のようにある特定の時間帯を指すのが一般であるが、この場合、ある事態の重要な事象を構成する時間を示す。

- (12) しかし、水の上につぶせになり、顔を水に浸ける練習をしている時、先生が支えている手をバツと離した。何分の一秒という短い時間だったが、たしかに、浮いた。(「五体不満足」)
- (13) とつぜん、映写機が故障したように、二人はじっと動かなくなった。どちらかが、何かしなければ、そのままいつまでも続きそうな、固くこわばった時間だった。(「砂の女」)

これに対して (14)、(15) では予定した時間への接近、到達を指示する用法である。

- (14) 下腹が急にまた痛みはじめた。玉枝はじっと下腹の痛さに耐えながら、ここで待つことにしようかと思った。しかし、もう夕刻である。遊廓はこれから活気を呈しはじめる時間である。(「越前竹人形」)
- (15) 僕と緑はそんな街をしばらくぶらぶらと歩いた。緑は木のぼりがしたいと言ったが、新宿にはあいにくそんな木はなかったし、新宿御苑はもう閉まる時間だった。(「ノルウェイの森」)

(14) では「夕刻」がどのような時間帯であるかを指し示し、(15) ではその場の状況からして通常の時間に達していることを(副詞「もう」とともに)述べたものである。(16) の「時刻」も特定の時間帯における行為発生を示唆している。

(16) 数日後、私は住職（われわれは彼を老師と呼んでいる）の部屋へ、新聞を届ける役目をいつかった。新聞が来るのは朝課がすみ、拭掃除のすんだころの時刻である。（「金閣寺」）

〈～時間ではない〉は当該事態に応ずるにふさわしくない時間帯でありながら相応の意味を認める立場や状況を述べる。

(17) 8～9時。中学校の生徒会が活動する時間ではない。しかし、夜の街を探検しているようで楽しかった。（「五体不満足」）

(18), (19) では過去の回想、想起を意図しながら、それぞれ「永い」、「むだな」という修飾語と一体となった特定の時間帯での行為の否定を表している。

(18) さて私が幻の金閣に完全に抱擁されていたのは永い時間ではなかった。（「金閣寺」）

(19) Yさん休職は一年近くに及んだが、それは彼にとっても会社にとっても決してムダな時間ではなかった。（「心の危機管理術」）

2.2 〈～一日だ〉、〈～日だ〉、〈～季節だ〉の用法

2.1でみた時間より比較的長い時間帯を認識しつつ、当該場面での特別な事態を差し出すものである。〈～一日だ〉は多く文章の冒頭や終結部において、

(20) それは十月末の明るい一日である。私はいつものように学校へゆき、夜の勉強をすませて、寝るべき時刻であった。（「金閣寺」）

(21) 昭和51年4月6日。満開の桜にやわらかな陽射し。やさしい1日だった。（「五体不満足」）

のように用いられる。〈～日だ〉は(22)のように通常とは異なる事象の発生

を表すのに用いられる。(23)のように主部の脱落もしばしば観察される。

(22) こちらも消えたか。今日はよくものが消える日だ。（「細菌No.731」）

(23) 玉枝がきたのは十二月の中ごろである。昼のうちの小雪が夕方になって荒れだした日である。（「越前竹人形」）

「日」は(24)のように時間副詞句になるほか、接続成分とした用いられた場合は、(25)のような時間節として条件を特化する言い方もある。

(24) 入隊した日、体格検査で即日帰郷になったんですって。（「黒い雨」）

(25) もし死人でも出た日には、大変なことになる。（「細菌No.731」）

〈～日だった〉は以下の事態展開の前触লের導入に用いられることも多い。

(26) 翌朝、吹雪はやんで、うす曇りの静かな日であった。二人はスキイを担いで坂道をのぼって行った。（「青春の蹉跎」）

(27) 関東の空っ風が吹き荒ぶ、ちょっと外に出ていると、耳や鼻や頭が痛くなってくるような寒い日だった。（「火車」）

〈～季節だ〉も過去の事態を表し、当時の状況を振り返ったり回想したりする働きがある。(28),(29)は季節特有の性格を一般的通念から述べたものである。

(28) 喜助は、ひょっとしたら玉枝がまた病気になったのではないかと思った。梅雨どきや、芽どきというものは、胸を患う者は注意をしなければならぬ季節だった。心配になった。（「越前竹人形」）

(29) 街のビヤホールは若い人たちで賑わっていた。その店に坐ると、小野はいらいらし、そして相好を崩した。もともと酒好きな男なのだ。初夏の、ビールには一番適した季節だった。（「青春の蹉跎」）

2.3 〈～時期だ〉、〈～機会だ〉などの用法

事態発生をより焦点化して意味付ける言い方として、時間名詞では「時期」、「時機」、「機会」、「チャンス」などが用いられる。

- (30) 担当医は私がそろそろ外部の人と接触を持ち始める時期だと言います。
(「ノルウェイの森」)
- (31) 彼は会社の仕事が面白くて仕方なかった時期だったし、小さな建売住宅だったけど家もやっと手に入れたばかりだったし、娘も幼稚園に馴染んでいたし、…
(「ノルウェイの森」)

〈～機会だ〉、〈～チャンスだ〉は好機の事態発生を示唆する言い方である。

- (32) この叱責は老師が殊更私を自室に招いた稀な機会だった。私はただうなだれて、無言でいた。
(「金閣寺」)
- (33) これこそ時計を持って総督のもとへ行き、シナ本国内に居住する家を総督に頼み、私が引続きシナ文字を学び言葉を習うまたとない機会だ。
(「マッテオ・リッチ伝」)

なお、事態発生時間を焦点化した「今」は、名詞述語文の〈～のは今だ〉以外には(34)のような接続辞、(35)の題目的提示としての用法が一般的である。

- (34) かつての「日本政治の安定神話」が崩れてしまった今、国民が政治家、経済人、官僚の尻を叩いて、日本の大転換を進めるべき時が来たようである。
(「日本経済の飛躍的な発展」)
- (35) 十八年という歳月が過ぎ去ってしまった今でも、僕はあの草原の風景をはっきりと思い出すことができる。
(「ノルウェイの森」)

3 直近の“予想”や“感慨”を表す用法

しばしば副詞「そろそろ」という気持ちをともない、予想した通りに事態が進行していくさまを述べる言い方である。

3.1 〈～頃だ〉、〈～頃合いだ〉、〈～時分だ〉の用法

およその時点を予想して言う場合に、「頃」「頃合い」が用いられる。

- (36) 解るとすれば、受胎の時期は、いまから逆算して六月末か七月のはじめ頃、彼が論文試験で眼の色を変えていた頃だということになる。
(「青春の蹉跎」)
- (37) 僕もそのとばかりで体育会系の連中に殴られそうになったが、永沢さんが間に入ってなんとか話をつけてくれた。いずれにせよ、この寮を出る頃合いだった。
(「ノルウェイの森」)

(36) は先行文(句)を言い換えたものである。「そろそろ～て(も)いい頃だ」は、発話時点からみて近似未来的に起こりうる事態を指示する言い方である。

- (38) そろそろ東京に戻ってもいい頃だなと僕は思った。(「ノルウェイの森」)
- (39) 人生とはそういうものです。偉そうなことを言うようですが、あなたもそういう人生のやり方をそろそろ学んでいい頃です。(同上)

(40)、(41)の「時分」も「でしょう」「だろう」とともに蓋然的な事態発生を述べる際に用いられている。

- (40) 私がナオミにこのことを話したのは、始めて彼女を知ってから二ヵ月ぐらい立った時分だったでしょう。(「痴人の愛」)
- (41) そうして今頃は奥さんが御嬢さんにもうあの話をしている時分だろうなどと考えました。(「こころ」)

3.2 〈～日々だ〉、〈～毎日だ〉の用法

日常的な喧噪などの常態をある種の実感や詠嘆をこめて描いたり回想したりする言い方で、共通して情景を総括するような働きがみられる。

- (42) ホテルマン25年の安田さんは、大阪・中の島の名門ロイヤルホテルで、この現象を逃がさじと華やかな舞台を演出するのに心をくたく。240人のスタッフを率い大中小の宴会場を駆け回る日々だ。(朝日1990.10.2)
- (43) 僕はそんな息苦しい背反性の中で、限りのない堂々めぐりをつづけていた。それは今にして思えば確かに奇妙な日々だった。生のまっただ中で、何もかもが死を中心にして回転していたのだ。(「ノルウェイの森」)

〈～毎日だ〉も同様に、話し手のある種の感慨(満足感など)を述べる。

- (44) 定年後、数年で他界する知人の悲報を聞くにつけても、働けることの幸せをかみしめている毎日である。(朝日2000.7.7)
- (45) 季節は梅雨入り前の、照りつける暑い毎日である。私が対面すると勿々、柩は荒涼たる岬の焼場に運ばれて、海のほとりで焼かれることになっていた。(「金閣寺」)

〈～毎日だった〉は過去の一時期における慣例、常態の回想に用いられる。

- (46) 秘書の仕事と言われたものの、実際にやる事は黒沼老人の命令で、さまざまな物を探す毎日であった。(「細菌No.731」)
- (47) 露天の行商でボスに上前をはねられ、警察に追われ、雨に泣かされる毎日だったことが、一日も早く自分の店を持ちたいという欲求を切実なものにした。(「心の危機管理術」)

なお、時間名詞「近年」、「今日」は(48)、(49)のように接続成分としては現れるが、名詞述語文〈～今日だ〉、〈～近年だ〉は確認されなかった^[注5]。

- (48) 国際的な仕事が増え、このことは関係責任者にとって深刻な問題となっている。(「適応の条件」)
- (49) 次から次へと凶悪犯罪が起こる今日、事件性に乏しい一人の老人の死に、いつまでもかわりあっている暇はなかった。(「細菌No.731」)

3.3 〈～時代だ〉、〈～昨今だ〉、〈～現代だ〉の用法

時間を大きく切り取って当該の事態が喫緊の話題にあることを示すものをあげる。時間名詞として「時代」「現代」「昨今」などがある。まず〈～時代だ〉についてみてみよう。(50)のように措定の意味付けとして用いられる用法と、(51)のように名詞止めによって呼び掛けるように用いられる場合とがある。

- (50) 一心に、それでいてひどく不味そうに、彼の食べている弁当は貧しく、朝、典座で私自ら詰めて来る弁当に、おさおさ劣らなかつた。昭和二十二年は、まだ闇でなければ、滋養分を摂ることのできなかつた時代である。(「金閣寺」)
- (51) 戦争を知らない世代が、平和の尊さを語り継がなければならない時代。記念館を通じて満蒙開拓は何だったのかを考えていきたい。(『日本と中国』2111号,2011.12.5)

(52)、(53)はこれからの近接未来のあり方を示唆する言い方である。

- (52) これまで道路整備は延長を伸ばすことに重点がおかれていた。これからは質の時代である。(「日本列島改造論」)
- (53) ひとりっ子は問題が多いから、どうしつけ、教育していかなければならないか、などと論じたり、解説したりしている時代ではありません。「ひとりっ子への教育、しつけが現代教育の基本」といえる時代です。(「ひとりっ子の上手な育て方」)

〈～時代だった〉は当時に回顧し、現時点からみた歴史的な意義付けを表す。

(54) 一九六〇年。これは、わが国の高度成長元年でもありますな。それだけ国が豊かになろうとしている時代だった。 (『激動の百年史』)

厳密な意味では時間名詞ではない「世の中」も「時代」と同様の意味を表す。

(55) 現代は思想家よりも思想仲買人の方が幅を利かせている世の中である。 (『百言百語』)

(56) 「住宅はあとから建ったのに」と工場側が既得権を主張しても通用しにくい世の中である。 (『日本列島改造論』)

〈～昨今だ〉、〈～ご時世だ／ご時勢だ〉もまた、進行しつつある事態、世相に対しての話し手の一定の感慨を差し出す言い方である^[註6]。

(57) 妻や子供達から見ると、さぞかし独善的でガンコな冷たい親父だったに違いない。神経症を経験してやっと心の柔軟性の大切さに気づき、過去の自分のいたらしさが身にしみる昨今ではある。 (『心の危機管理術』)

(58) 「東南アジアから来た女性が、日本で働きたいばかりに日本の男と偽装結婚するご時勢ですからなあ」 (『火車』)

〈～現代だ〉には次のように状況提示の用法が多くみられる。

(59) これまでの二年ごとに繰り返される変異の予想は、例えば二十年前の頃とは比べものにならないほどに正確になってきている。遺伝子に関する知識が、当時とは隔世の様相を呈している現代だ。コンピュータでの予想も可能になっている。 (『細菌No.731』)

「～(という)のが現代だ」のような倒置文になることも多い。(60)の「～のが現状だ」も同じような意味で用いられる。

(60) 障害を持つ学生が、快適なキャンパス・ライフを送れるという状況には程遠いというのが現状だ。 (『五体不満足』)

「現代」は〈～現代、〉のように節になりうるが、「現状」は〈～現状、〉という節としては用いられない^[註7]。「現在」は〈～現在、〉のように節として用いられるが、〈～現在だ〉の用法はみられない。

(61) 第二次大戦が終る少し前まで、アメリカは「世界の銀行」のつもりでいたが、貿易赤字に苦しむ現在、その余力はない。(『日本経済の飛躍的な発展』)

4 時間の近接、緊迫した状況を表す用法

4.1 〈～最中だ〉、〈～途中だ〉の用法

「最中」は「食事の最中」「相談している最中」のように、名詞句を生産する一方で、動作行為の行われている時間帯を抽出し、特化する用法で、次に展開する事象の導入的な役割をもはたす。

(62) 式は約二十分にして完了。解散する前に、防空体制の動作が機敏を欠くという事で、副官より散々文句を云われていた最中である。聞きなれたB29一機の爆音が聞えた。 (『黒い雨』)

(63) 伊勢市では、商売課の店舗や地元の会社なんか、敢えて鉄筋の建物を取り壊して木造に建て替えている真っ最中なんです。 (『火車』)

(64) 幸い、間もなく終戦となり、叔父は釈放された。今度は軍国主義から一転して連合国軍総司令部による民主化が進められていたさなかだ。 (朝日2011.11.15)

「最中」は時間節〈～最中(に／で)〉のように用いられることも多い^[註8]。

(65)「この騒ぎの最中、あなたがたを担いだようなことになって申しわけありません。しかし、こんなことになってしまいました」 (「黒い雨」)

「途中」は接続成分、文末成分ともに用いられる。

(66) 僕は大野浦の駅から国民学校まで行く途中、向うから来る三十前後の綺麗な顔だちの婦人と擦れ違った。 (「黒い雨」)

(67) 同署によると、大学生はこの日朝、帰省先の兵庫県新温泉町内から茨城県へ向かう途中だった。昨年8月に開通した余部新橋での転落死は初めて。 (産経2011.1.3)

4.2 〈～直後だ〉、〈～瞬間だ〉などの用法

「直後」「直前」「間際」「一歩手前」は事態発生直前の前後を表し、接続成分となるほか、文末成分としても現れる^[注9]。

(68) どうやら、わざとえくぼを見せつけているのだと気づき、思わず体を固くする。身近な死について語った直後ただだけに、よけいみだらに思われた。 (「砂の女」)

(69) 砂と汗でふやけた皮膚は、もう炎症をおこす一歩手前だった。 (同上)

(70) 僕は朝の出勤で、いつもの通り可部行の電車に乗るため横川駅の構内に入った。ちょうど発車間際であった。 (「黒い雨」)

「瞬間」も後続の事態を導入的に述べる際にも用いられる。

(71) 怖しい瞬間であった。他の兵士等もこんなひどい泥に漬っているのだろうか。みなも私と同じだろうか。それが確かめたかった。 (「野火」)

(72) Kに対する私の良心が復活したのは、私が宅の格子を開けて、玄関から坐敷へ通る時、即ち例のごとく彼の室を抜けようとした瞬間でした。彼は何時もの通り机に向かって書見をしていました。 (「こころ」)

実際には、むしろ接続成分として用いられることが多いようである。

(73) しかし、慈海に軀をゆるそうとした瞬間、障子にうつった影は何だったろう。里子はふとおびやかされている自分を知った。 (「雁の寺」)

4.3 〈～後だ〉、〈～矢先だ〉、〈～段階だ〉の用法

時間の前後関係のうち、「後」は文末名詞としてしばしば現れる。

(74) そうして発車寸前の汽車に乗込んだものの、満員で汽車がのろく、やがて塩町で乗換えようとすると庄原行の終列車がもう通過した後でした。 (「黒い雨」)

(75) 火は見え、煙だけ湯気のように、立ち去り難く、その累積の頂上に纏りついていて、そして風に吹き散らされるのを惜しむかのように、相寄り束になって、中空目指して、目的あり気に立っていた。またも草原が燃えた後であった。 (「野火」)

「矢先」は事態の開始直前の状況を表し、〈～矢先(のこと)だ〉、〈～矢先(のこと)だった〉のように用いられる。

(76) 不義密通も罪なれば、墮胎はさらに罪が重い。これが新聞にのった。忠平ならずとも、京の市民は、この記事を読んで蒼ざめた。墮胎に関する知識をふかめていた矢先である。 (「越前竹人形」)

(77) この法律は内閣提案の形をとっているが、実体は議員立法であった。これをスタートにして取り組んだのが「電源開発促進法」という議員立法である。占領軍が日本から戦力をなくすとい考え方を前抛にして、潜在戦力に言う重化学工業、精密機械工業とを賠償施設として日本から撤去としていた矢先のことであった。 (「日本列島改造論」)

「矢先」は時間節〈～矢先(に)、～矢先のところで〉の形でも用いられる^[注10]。

(78) こどもダメか、そう思っていた矢先に、若手職員の人たちが「前向き検討してみましょーうよ」と部長さんに反論。その甲斐あってか、話し合いは受け入れの方向で進んでいった。(「五体不満足」)

(79) ところが、甲神部隊のものも奉仕隊員も広島に到着して二日目に、漸く仕事に取りかかった矢先のところで被爆した。(「黒い雨」)

「段階」は接続成分〈～段階で〉、文末成分〈～段階だ〉としても用いられる。

(80) しかし、なんとか先生の手を借りて、潜るところまではできるようになった。いよいよ、浮く段階だ。(「五体不満足」)

否定形式〈～段階ではない〉、〈～場合ではない〉は、〈～どころではない〉の意味で用いられる。

(81) 「東海村がいけなければ、他所へもってゆく」という段階ではない」(朝日2011.11.21)

(82) しかし、ただ驚いている場合ではなかった。せっかく大学へ行こう、勉強をしようと思った時にその環境が見つからないのだ。(「五体不満足」)

5 おわりに——今後の課題

本稿では時間名詞を述語成分とする名詞述語文の諸相について議論した。その結果、次のような意味機能が観察された。

- 1) 〈～時だ〉、〈～時期だ〉、〈～時代だ〉のように、事態の周囲への伝達、気付け、注目表示として提示する。
- 2) 〈～日々だ〉、〈～毎日だ〉のように、日常的に生じる、ある種の実感や感慨をこめて描いたり回想したりする。
- 3) 〈～現代だ〉、〈～昨今だ〉、〈～ご時世だ〉のように、談話の導入部分、終

結部分として当該内容をきわだたせる。

- 4) 〈～最中だ〉、〈～瞬間だ〉、〈～途中だ〉のように、時間認識における主体の行為のあり方を明示する。

これらの諸形式には前文内容の同格表現^[註11]といった性格を基調としながらも、主部が脱落し、詠嘆的に差し出されるという特徴がみられる。

本稿で議論した名詞述語文の諸形式には、話し手の眼前事態に対する“示唆”、“感慨”といった表出の機能が認められた。従来、こうした話し手の心情の表出はそれが比較的緩やかであるがために看過されがちであったが、伝達内容の明示にかかわるムード的要素をなす点を見てきた。

なお、考察の過程で言及した〈～矢先〉、〈～矢先だった〉、〈～最中に〉、〈～最中だ〉等にみられる接続成分と文末成分の相関関係については紙面の関係上、指摘するにとどまったが、重要な課題でもあり、別の機会に考察したい。

名詞述語文には眼前の事態を継続存在するものとして認識する、いわば一種の静態的なものの見方、発想があり、それが情報の知識としての定位に寄与するところが少なくない。もっともこうした名詞述語文がどのような文脈、前後の文環境において出現しうるのかについては、被修飾名詞のカテゴリカルな分類と併せて考察を進めていく必要がある。ただ本稿で扱った言語データは書き言葉が中心であり、今後は話し言葉、たとえば講義やスピーチなどの談話、場面において、名詞述語文がどのように生起するのか、といった課題が残されている。本稿で考察した観点はその一部にすぎない。本稿で扱った項目はその一部であるが、今後の文末名詞、名詞述語文の研究に向けて取り組むきっかけとしたい。

〈大東文化大学〉

〈付記〉

本稿は文部科学省科研費平成23年度研究課題「大学学部留学生のための講義の談話に関する研究（研究代表者佐久間まゆみ）」（研究課題番号:23320110）のうち、理論的研究の一部である。

注

- [注1] …… (1a), (1b) は主部と述部の入れ替えが可能だが、(1c) では不可である。
(1a) 来週見学する工場は東京自動車です。
(1b) 私は去年三月に日本へ来ました。(; 去年三月は私が日本に来た日だ)
- [注2] …… 新屋 (1989) の分類では「言語で表わされたもので状況の時間的または空間的な位置関係を述べるもの」に相当する。なお、ここで扱う時間名詞は時間副詞としての機能も内包するものとする。
- [注3] …… 本文用例は主として北京日本学センターの日中対訳コーパス、新聞などを使用した。出典表記のないものは作例である。
- [注4] …… <～時だ> 構文は、「今ほど～時はない」のように、逼迫した状況を示唆する。たとえば、(6) は次のような意味を含意する。
(6) 今ほど、沈着と冷静こそが求められるべき時はない。
また、<～時だ> は次のような複合名詞としての用法もある。
例：釣りの話をしながら、智が二度も続けてくしゃみをしたので、そろそろ引き上げどきだと思った。(「火車」)
「攻め時」「梅雨時」「買い時」なども「Xに適した時期」を意味する。
- [注5] …… 「今日」は「～今日この頃だ」の形で挨拶時候文などに用いられる。
例：暑さもやわらぎ秋の訪れを感じさせる今日この頃です。
- [注6] …… 「昨今」は「昨今は」、「～昨今」のような言い方が可能である。
例：昨今は小学生でも携帯を持っている。
例：宅地化が進む昨今、農地の荒廃も深刻化している。
- [注7] …… 「現代」「現状」は、「高齢化の進む {現代/現状} では」のような題目提示として用いられる。
- [注8] …… 「最中」は「勉強中」などの接辞「-中」への言い換えがほぼ可能である。
息子は二階で勉強している最中だ。⇔ 息子は二階で勉強中だ。
- [注9] …… 「直前」には「矢先」「途中」などと同様に「のこと」が後接する現象が見られる。
例：時はまさに第一次ソロモン海戦が始まる直前のことだった。
こうした「のこと」は事態の具体的な発生を指示する働きがある。なお瞬間を表す構文の種類については田中 (2010) を参照。また、時間節の概要については日本語記述文法研究会 (編) (2008) を参照。
- [注10] …… 「矢先」は次のような (XのはY矢先 (のこと) だ) という、結果からみた説明の文脈において現れるのがそもその用法であると考えられる。
例：大事な用件を思い出したのは、慌てて家を出た矢先のことだった。
なお、本稿で示した名詞述語文の事例については、田中 (2012) を参照。本冊には文末名詞をふくめ、64項目を取めた (<S1のはS2Nだ> 形式を除く)。
- [注11] …… 同格的表現とは、前文で言及した内容を再度、名詞で総括するような文を指す。後文の名詞句は前文の名詞句を言い換えたものである。
例：昨日、多くの本を古本屋に売りに行った。父が残した蔵書である。

・先週見た芝居はけっこう面白かった。K氏の遺作である。
こうした名詞述語文の詳細な分析についても今後の課題としたい。

参考文献

- 青木博史 (2010) 「名詞の機能語化」『日本語学』29(11), pp.40-47. 明治書院
井島正博 (2002) 「主語のない名詞述語文」『日本語学』21(12), pp.78-90. 明治書院
井島正博 (2010) 「名詞述語文をつくる名詞節一形式名詞述語文の成立根拠を考える」『日本語学』29(11), pp.48-57. 明治書院
井上優 (2010) 「体言縮め文と「いい天気だ」構文」『日本語学』29(11), pp.58-67. 明治書院
佐藤琢三 (2004) 「「模様」の報告用法について」『国語学』55(4) (通巻219), pp.73-84. 日本語学会
佐藤琢三 (2006) 「名詞カタチの文末用法と説明の機能」益岡隆志他 (編) 『日本語文法の新地平3 複文・談話編』 pp.137-153. くろしお出版
新屋映子 (1989) 「「文末名詞」について」『国語学』159, pp.1-14. 国語学会
田中寛 (2004) 『日本語複文表現の研究—接続と叙述の構造』白帝社
田中寛 (2010) 『複合辞からみた日本語文法の研究』ひつじ書房
田中寛 (2012) 『日本語文末機能辞用例・用法辞典』(私家本)
角田太作 (1996) 「体言縮め文」『日本語文法の諸問題』 pp.139-161. ひつじ書房
日本語記述文法研究会 (編) (2008) 『現代日本語文法6 複文』くろしお出版
野田時寛 (2006) 「複文研究メモ (7) 一文末名詞をめぐる」『人文研紀要』56, pp.35-51. 中央大学
松木正恵 (2011) 「複合辞研究史IX—辞的表現研究の広がり」と深化『学術研究 (国語・国文学編)』59, pp.1-9. 早稲田大学教育学部

用例出典

宮部みゆき『火車』(双葉社1992)、霜村悠康『細菌No.731』(大和書房2009)、『日本と中国』など各種新聞。このほかの出典作品は北京日本学研究中心『日中対訳コーパス』(2002～2003年版) 収録のものによる。